

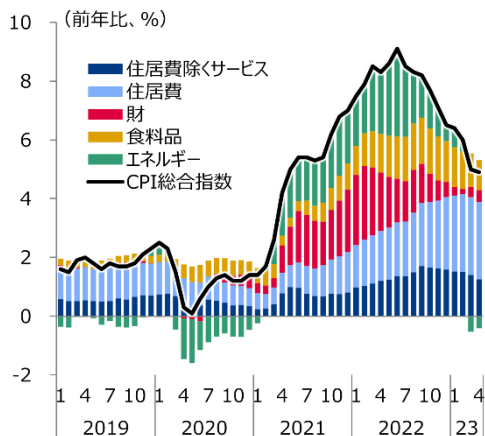
米国

消費者物価指数（2023年4月）

物価の伸びは鈍化継続も、2%物価目標到達への道のりは長い

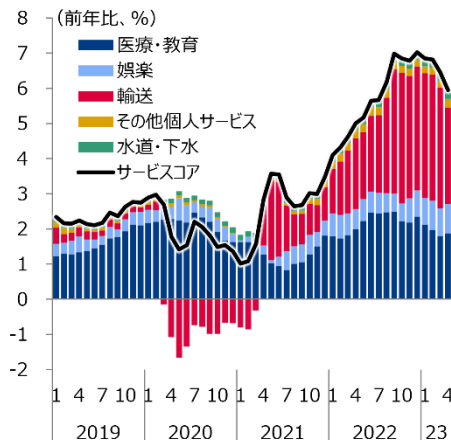
政策・経済センター
浅井優汰
03-6858-2717

1 消費者物価（総合）



出所：米国労働省より三菱総合研究所作成

2 エネルギー・住居費除くサービス物価（サービスコア）



出所：米国労働省より三菱総合研究所作成

評価ポイント

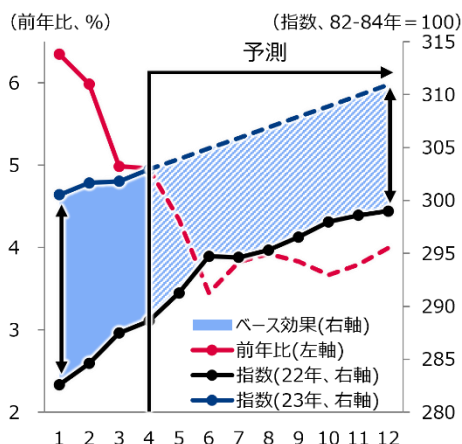
今回の結果

- 4月の消費者物価指数（CPI）は前年比+4.9%（前月同+5.0%）と10カ月連続で伸びが鈍化した（図表1）。変動の大きなエネルギーと食品を除くコアCPIは同+5.5%（前月同+5.6%）と緩やかな伸びの鈍化が続いている。
- 項目別では、住居費が同+8.2%（前月同+8.3%）と2年2カ月ぶりに伸びが鈍化した。物価の基調を示すエネルギー・住居費除くサービス物価（サービスコア）も同+5.9%（前月同+6.5%）と高水準だが伸びは鈍化した（図表2）。

基調判断と今後の流れ

- 4月の総合CPIは伸びの鈍化が続いている。また、FRBが政策運営上注視するサービスコアも伸び幅の鈍化基調を示している。ただ、コアCPIの伸びの鈍化ペースは遅く、インフレ圧力は依然強い。
- 先行きの物価の伸びは、住居費の伸び鈍化の継続や供給制約の緩和に伴い、緩やかに鈍化を続けるとみる。ただし、2%の物価目標への収束には時間を要し、24年以降になるだろう。
- 足もとでは物価の伸びが順調に鈍化しているように見えるが、これは前年の高い伸びの反動で鈍化している面が大きい（ベース効果）。23年後半にかけては、前年の伸びが緩やかであったことから、ベース効果は剥落し、物価の伸びの鈍化ペースも鈍ってくるだろう。仮に5月以降、1-4月平均と同じペース（前月比+0.3%）で推移した場合でも、23年6月以降は物価の伸びの鈍化は一巡し、2%を上回る前年比+3.5%前後の伸びが継続するだろう（図表3）。
- 消費者の1年先の期待インフレ率は、23年5月+4.5%と依然高い（図表4）。また、FRBが注視する5年先の期待インフレ率は5月+3.2%と2011年3月以来の高水準に達したほか、企業の期待インフレ率も高水準で推移する。消費者・企業ともに、インフレ継続を織り込んでおり、物価安定への道のりは長いだろう。
- 金融政策について、FRBは既往の金融引き締め効果を考慮し、次回6月FOMCでは、5.00-5.25%の金利水準を据え置くとみる。また、人々の期待インフレ率を十分に低下させる必要性を鑑み、23年中は5%超の金利を維持しよう。

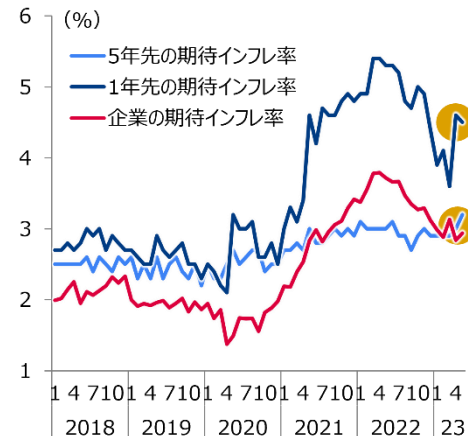
3 物価指数（総合）と「ベース効果」



注：横軸は月。予測は前月比+0.3%（23年1-4月平均値）で推移すると仮定し、算出。

出所：米国労働省より三菱総合研究所作成

4 消費者・企業の期待インフレ率



注：期待インフレ率の直近は23年5月。企業の期待インフレ率は1年先で、アトランタ連銀管内企業を対象に算出。

出所：ミシガン大学、アトランタ連銀より三菱総合研究所作成